博物館学雑誌 第35巻 第1号（通巻51号）85～95ページ 2009年12月

【研究ノート】

児童博覧会について
—明治時代を中心に—

A Study of Children's Exposition
—Mainly the Meiji Period—

福田 ふみ※

Fumi FUKUDA

1 はじめに

こども博覧会とは別に、こどもを対象とした展示空間にこども博覧会、児童博覧会というものがある(1)。こども博覧会とそこから派生したとも取れる三越の児童博覧会について考察し、その展示の目的及び現代のこども博物館へと発展しなかった理由を導き出したい。

2 こども博覧会の誕生

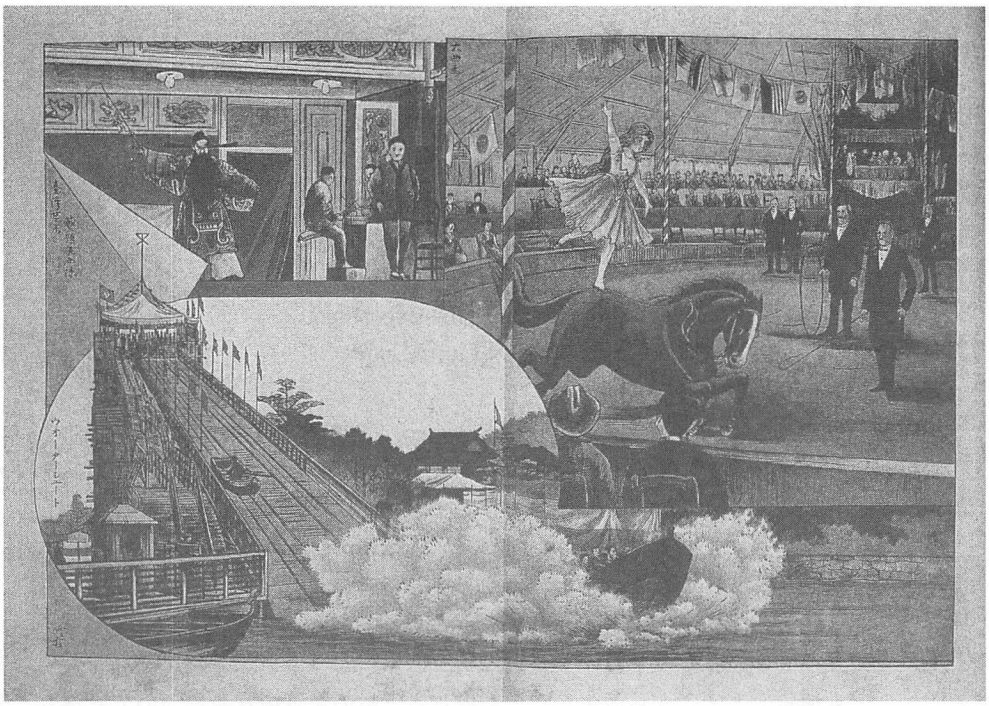
1756年のロンドン勧業博覧会開催後、1851年のロンドン万国博覧会を皮切りに世界中で博覧会が開かれるようになる。こういった博覧会への日本の参加は早く、1867年パリ万国博覧会、1873年ウィーン万国博覧会などへ日本は工芸品などを出品している。また日本独自の博覧会の開催も早い段階で行われている。1871年京都博覧会、文部省博物局による1872年の湯島聖堂博覧会など、日本各地で内国博覧会を催すようになる。明治になると、富国強兵・殖産興業の名の下に、西欧文明を移入して行き、その中で博覧会は、多くの一般市民に公開されるようになる。それは、モノによる教育が一般市民への教育に大変有効であると考えられていたからである。しかし第五回内国勧業博覧会（1903年）のとき、近代的な見世物の側面を底に秘め、数多くの娯楽施設が導入され、民衆の興味をひきつけたのである。(2)

全館にイルミネーションが点灯され、博覧会史上に輝かしい光彩を放った。呼び物はウォーターシュート、メリーゴーランド、パノラマ世界一周館、大曲馬などの外来の娯楽施設であった。

入場者は内国博覧会はじまって以来の記録をつくった。(寺下勅2005)

この頃から、博覧会の娯楽的傾向が顕著になってきたと言えるのである。明治末期には、博覧会の主導が政府から、公共団体、民間へと委譲されていくが、これは娯楽化の傾向と同時期であ

※ 国学院大学大学院文学研究科史学専攻博物館学コース 修士課程 平成21年3月修了



※寺下勅2005より転載

る。つまり、生産奨励をするものであった博覧会は、民間主催による販路拡大の場に変わって行ったのである。更に、さまざまな顧客を集めようと、「婦人」や「衛生」、「家庭」といった言葉を付けた博覧会が登場し始め、このような流れの中で児童博覧会が誕生したという訳である。当初は生産奨励のためにあった博覧会が、ある時から消費拡大のための手段へと変わっていった為、広告として博覧会を利用する故に開催地は人が多く集まる大都会に限られてくるのである。そのある時というのが明治36年という見方があり(3) これは日本で初めてのこども博覧会が開催される二年前である。つまり、生産奨励の流れの中で、大都会で発生したものがこども博覧会であったのである。

3　日本最初の児童博覧会「こども博覧会」について

1905年（明治38年）９月頃、沼田藤次（作家）、樋口勘次郎（教育学者）の間でフランスのパリで開催された「こども博覧会」が話題となったことが、子どもそのものに注目した博覧会が開催されるきっかけとされている(4)。また、こども博覧会の賛助会員を務めることとなる巌谷小波が書いた『洋行土産』の中で、巌谷が伯林で見た児童博覧会の一種を紹介したことも(5)、きっかけとなったのではないかと思う。

また、この章で重要人物となる巌谷小波の従来のこども博覧会思想について述べると、巌谷小波は、明治３年東京生まれた明治・大正期の児童文学者である。巌谷とこども博覧会の出会いに

ついて、彼は次のように記している。

私が初めて児童博覧会と云うものを知ったのは、今からもう八年前、即ち千九百一年の春、当時滞在中の伯林の一隅にそれの一種の開かれた時でした。尤もその時のは、むしろ児童に見せる為の、絵画彫刻類が陳列され、また児童の手に成った物も、参考の為め、蒐集されたのでしたが、私は少なからず趣味を感じて、斯云う風の展覧会は、是非日本でも開きたいと思いました。またその以前にも、彼地の市外を見物する中に、キンダア、バアサと称して、児童の需要品のみを取り揃えた、立派な店が所々にあるのを見受けて、これが又、羨ましくてならなかったのです（巌谷小波1909）。

つまり、当初の小波の理想は、子どもの製作品と子ども用品の両方を展示することであったのである。また小波がドイツでみた博覧会は「子どもの生活の中の芸術」展であったとされている(6)。この頃ドイツでは、芸術教育運動が起こっており、「子どもの生活をもとにして学校が系統的に発展し、子どもの後の生活に有機的に生かされるよう、そしてこれまでのように異質な夾雑物として子どもの自発的発達を妨げないようにという期待」が教育に込められており、その中で開かれたのが「子どもの生活の中の芸術」展であったとされている(6)。すなわち巌谷が最後までこだわった「児童本意」の考えは、ここに端を発すると観てよいだろう。そして巌谷は、伯林で児童博覧会を観た際、このようなことも述べている。

殊に同一児童の作物について、その年齢を一々書き添え、その想像と技術との、漸次に発達して行く有様を、委しく示した物などは、心理上、教育上、大いに参考と成るべき物である。（中略）然し残念ながら我が国では、まだこの様な会を開くことが出来ぬ、否、開いて出来ぬ事は無いが、まだ誰も思ひつかぬのである。ああ世の児童教育家諸君、せめては教育博物館の一部にでも、この種の展覧会を開いては如何せんか、頃日漸く美育の声を聞く。我は美育の第一手段として、我邦にこの会の起こらんことを、切に希望する者である。（巌谷小波1889）

こういった点からも教育博物館と児童博覧会をかね合わせる構想を持っていた人物として巌谷を捉えることは重要であると考える。そしてこういった理想を高々に掲げた巌谷の考えは、やがてこのこども博覧会へと実を結ぶこととなるのである。では、本題のこども博覧会に戻るとする。こども博覧会の詳細は以下の通りである。（是澤優子1995）

・役員

会長　東久世伯爵

幹事　豊原清作　沼田藤次　吉浦祐ニ　久保田米斎　桑谷定逸　福田琴月
　　塩谷濤作　柴田常恵　樋口勘次郎　関以雄　杉原茂樹

・賛助会員　（95名）

森鴎外、巌谷季雄（小波）、坪井正五郎、日比翁助等。

・出品

91個人、37団体（幼稚園、小学校、盲亜学校、女学校、出版社、博物館、農商務省等）より出品。第一部から第六部に分けて分類。

第一部：図書、絵画、写真、彫刻品、文房具類

第二部：衣服調度類

第三部：体操、音楽に要する諸機類、食品類、住居に関するもの

第四部：玩具、遊具に関するもの

第五部：児童の製作品

第六部：児童教育上の参考品、各部に漏れたもの

展示空間は、図１のように５箇所に分けられ、一応の区切りをつけていたようである。しかし、「柳澤伯の児童博覧会感想」(7) には、「此次若し開会する場合には会場に陳列する品物は成るべく同種類のものを一緒に並べて貰いたい。赤ん坊のものは赤ん坊のもの、児童のものは児童のものと云うように総て年齢に適合したものの部門に分けた方がよいと思います。」とあり、これは、1906年（東京上野）のこども博覧会に関しての感想であるようで、ここから察するに、このこども博覧会の展示は、一部、二部などには分けていたものの、その部屋の中では分類されず、展示とは言えない、理論も何も無い羅列であったことが窺える。展示上の効果から見れば、このこども博覧会はお粗末なものであったようであるが、こども本位の博覧会としては日本で最初であり、その定義も「子供その者の競進会に非ずして、子供の為の博覧会なり」とされていた。これは、真にこどもの為を思った博覧会であることが分かり、純然たる教育的事業であり、営利の念を離れたものであったのである。これは、こどものための展示という歴史において、重要な位置を占めるのではないだろうか。また、この博覧会の効果として「而もかかる玩具は、児童の家庭時代に於ける教育から申しますと、欠くべからざる必要品でありますから、もう少し玩具を改良したい」という児童教育における玩具の必要性を説いたことでも重要な役割を果たしたという説（是澤優子1995）もある。しかし、問題点は、展示の羅列のみではなく、十分な整理と審査が行われていなかったことも挙げられ(8)、日本で始めてのこども博覧会は、課題の残る博覧会となったのであった。

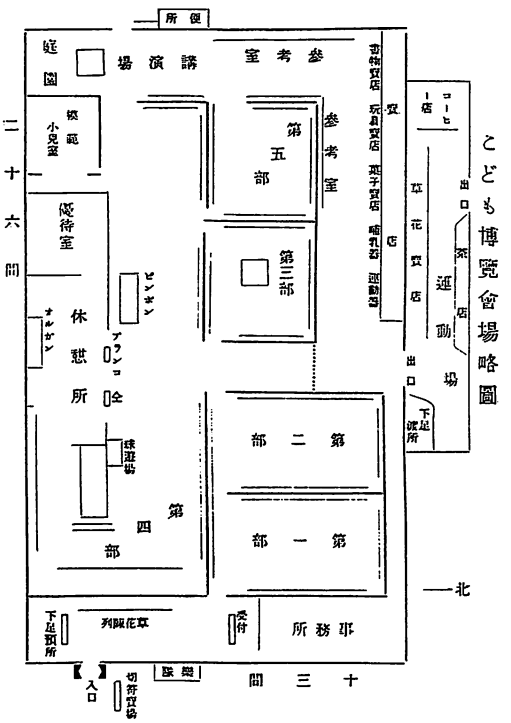


図１

4　三越の児童博覧会について

先のこども博覧会の結果を反省し、発展させたものに三越の児童博覧会が挙げられる。明治期の三越は、

> 明治30年代末以降、観工場にとって代わり、大都市における商品の常設化されたディスプレイ装置として主役を担っていくのが百貨店である。この時期、三越、高島屋、大丸、白木屋、松坂屋、十合等の、多くは現在までつづく百貨店が、次々に呉服店からの転身を成し遂げ、広大な商品を店内に展示して、顧客たちのまなざしを誘惑していくようになるのである。なかでも、この動きを先導したのは三越である。すでに一八九五（明治28年）、店舗の一部で陳列販売をはじめ、「良賈は深く蔵す」式の伝統的小売方式からの脱皮を図っていた同店では、一九〇〇年にはこの方式を全店にひろげ、同時に呉服切手（商品券）の発行、女子定員の採用、ショーウィンドーの設置、通信販売の開始など、欧米の百貨店をモデルとする新機軸を次々に打ち出していく。（吉見俊哉1992）

といったように、広大な商品を展示するという、注意の喚起を利用し、客に購買意欲を高める戦術を早くに打ち出した三越は、「子ども」についても早い段階で注目し始めるのである。三越が児童博覧会を行った時代の専務取締役は、日比翁助であった。彼は、「こども博覧会」賛助会員の一人であり流行会（明治末から大正期にかけて三越の代表的研究会）の中心的人物でもあった。「日比君は一面無邪気で、児童を愛することが厚かった」という文面から日比は、こどもを真に愛する人物であったことが窺える。また学俗協同を唱えた人物としても重要である。

> 政治会に於ける後藤新平伯は自身の傘下に衆智衆能を集めるに有名だったが、その後藤が日比を称揚して「学俗協同を計る無二の実業家だ。」と言った。正に三越の日比は途上の如く多くの各界の権威者を招いて、一種の諮問機関たらしめた。実業界でかくの如く多方面の人材を集め、談笑の裡に提案を聞き進言に耳を傾け、そして着々実業発展のうえに実現さしたものが他にあるであろうか。この點に於いて日比は実業家というよりも、寧ろ政治家に近いのであった。
>
> 百貨をして単に如何にすれば売れ行き好からしむべきか、如何にして三越の利益を莫大ならしむべきかが、もし日比の衆智衆能を集める目的であったとすれば、それら多方面の人材は三越の役員であり店員たるに過ぎないのである。
>
> 児童博覧会にせよ、児童用品研究会にせよその根本精神は社会教育にあり、社会の福祉進にあり、文化の向上にあった。（星野小次郎1952　pp.133-134）

そんな日比が、巌谷小波に触発され実際に欧米の児童博覧会を視察したところ、直ちに気に入り、日本でも子どもそのものに注目した博覧会を実現させたいと思ったのであろう。

日比が会長を勤める児童博覧会の開催の由来を三越は、

> 児童教育の忽諸に附するべからざるは、已に識者間に唱導せらるるところにして頃日また児童に関する各般の事業大いに進捗し、児童教育上の必需品は更なり、衣服にまれ、玩具にまれ、さては運動、遊戯に類に至るまで、驚くべき発展を示しつつあるは事実なり。而して

今其進捗、発展の後を繹ねんとす、いかなる方法、いかなる手段を以ってせば、具体的に網羅展覧し得べきや、即ち先づ児童博覧会を開設して、洽く児童に関する必需製作品を蒐集し、按配陳列して以って廣く江湖に紹介するのは外あらず、これただに児童育成に資するところ多大なるのみならず、又以って斯道奨励の良策なりとす。(9)

としている。つまり児童教育の発展に必要な玩具等を蒐集展示し、広く一般に提示することを目的にしていたことが分かる。そもそもの児童博覧会には二様の形式がある。一つは児童の製作品を網羅陳列するもので、他方、児童の必需品を広く蒐集陳列するものである。三越は、後者の児童博覧会を趣旨としていたことも同時に分かる。またその目的を児童に関する各方面の調査、改善発達の進歩を見るためとし、「明治今日の新家庭中に清新の趣を添えんこと」を期待していたのである。そういった目的で広く児童の必需品を蒐集するのであった。

しかし、何故三越がこども本位の博覧会をやろうと思ったのであろうか。それは、当時注目され始めていた児童教育を利用した商売戦術といった面も捨て切れないが、顧問に巌谷小波が在籍していることに注目したい。彼は、児童本位の博覧会などを開きたいということを常に希望していた人であったので、明治45年の大博覧会には児童館とか子供館とかを附設させたいと希望していた。しかし不幸にしてこれが延期となり遺憾に思っていたところに舞い込んだのが三越の児童博覧会であった(10)。そういった考えを持った巌谷が顧問であったからこそ、三越の児童博覧会は、商業の面を内に秘めながらも児童の教育発展を基本理念とした博覧会が出来たのではないだろうか。

次ぎに、明治時代に行われた第一回～第四回の三越の児童博覧会を概見して見る。

第一回募集品は、「児童博覧会規定」によれば以下の通りである。(是澤優子1997年)

① 玩具、人形、遊戯一切
② 児童に関する図書、絵画、写真、その他印刷物
③ 和洋児童服及び付属品一切
④ 帽子、靴、下駄、草履及び付属品
⑤ 少女用小間物、化粧品及び造花類
⑥ 洋傘、袋者その他児童携帯品一切
⑦ 乳母車その他乗物類
⑧ 学校用品及び文具類
⑨ 体育運道具
⑩ 児童用椅子、卓子その他什器類
⑪ 和洋楽器及び付属品
⑫ 児童に関する菓子及び食料品
⑬ 動植物、地理等の標本
⑭ 建物、機械、船舶、武器等の模型又は標本
⑮ 保育用及び教育用器具

会長に三越専務の日比翁助、顧問に巌谷小波、審査員に新渡戸稲造　高島平三郎　坪井正五郎など12名が居た。総出品総数は、17854点であった。出品者数は、273人で受賞者は185人であった。会場を美術、建築、体育、工芸、尚武、機械、外国、園芸、動物、参考の12部門に分け展示を行った。また陳列の順序に至っては、こども博覧会のような羅列にならないよう、明治33年の巴里の博覧会、明治37年のセントルイの博覧会が特に理論的に陳列したことを参考に上げ、理論的陳列を目指したことが窺える。先にも述べたが、1906年の日本でのこども博覧会の陳列は羅列としか言い様が無かった為、だからこそこの反省を生かした理論的陳列を三越はより意識したのであろう。巴里の万国博覧会人類学部物品陳列のお粗末さを鋭く指摘したこと等で博物館学でも有名である坪井正五郎が児童博覧会で演説を行ったり、児童博覧会の賛助会員を務めたりしていたことも、理論的陳列には一端があるだろう。何故なら、坪井は資料の配列の重要性を語った人物であるからである(11)。もう一つ三越がこども博覧会の反省を生かした点がある。それは、巌谷が当初から目論んでいた出品物の審査である。またそこから派生し、出品物を審査する中で、玩具を製作する実業者が児童の「生理、衛生、教育、心理等」を分かっていないことから、主に審査員で構成される児童研究会（1909～1923）が発足されたことも重要である。「いづれにしてもその間、「児童研究会」が玩具を初め各種児童用品の改良普及に取り組んだことで子どもの日常生活用品をはじめ玩具、図書などが主に専門的な立場から見直され、日本の児童用品の進歩に貢献したことは評価されるべきであろう」（中村喜代子1997）という意見もあり、児童研究会は、大きな成果を生んだのである。

そして児童博覧会の目的と効果を以下のようにまとめている。（みつこしタイムス第7巻8号臨時増刊号1909　pp143-144）

第一、一般の見物人に対しては一方では児童の保育器、食料品、服飾、玩具等の色々の出品を広く見せて、成る程こういう児童向きの好い物、新しい品があると合点させて実物教育すると同時に、又他方では其結果として世人の児童に対する注意を惹き起こし、興味を持たせて児童教育を重んぜしめるようになる。

第二、に児童自身が此博覧会に来て、娯楽中に有益な出品を見たり、買ったりして教育上の利益をうける。

第三、に児童の教育者及び研究者は、此博覧会で我国の現今の人の児童に対する解釈や設備の程度等を見ることができる

こうした明確な理論的陳列と明確な目的と効果を掲げ、三越の児童博覧会は開会したのである。

その後、回を重ねた児童博覧会の実際の成果は、いかなるものであったのであろうか。まず、後の評価として小松徹三のものを紹介する。

この兒童博覧会は、わが國兒童生活の為めに一時代を劃し、然かも二つの大なる功績を今日まで残しているのである。

第一は、「こども」といふものを社会的研究の対照としたこと、その為め子供の幸福の為めの諸機関が急速に進歩したこと。子供とデパートとを結びつけたこと、然して今日三越の

顧客となっている主人公達の中に、当時兒童博覽会の小さいファンであったものが沢山あって、今日でも当時を懐かしく思っているものがある。

第二は、当時 百貨店の平民化について。この児童博覧会の復産物として、学者並に児童研究家を網羅して児童用品研究会が組織されたが、これ亦貢献するところ頗る大なるものがあった。(小松徹三　1938)

「こども」を社会的研究の対照としたことや児童用品研究会が発足されたことは、やはり大きな成果を挙げたと言えるのである。

次ぎに、児童博覧会当初の評価として審査委員の坪井正五郎の評価を紹介したい。

坪井正五郎は、人類学の父、日本考古学の確立に努めた人物として知られている。また玩具の考案をしたり、三越の「児童博覧会」の審査員をしたりと、精力的に児童博覧会に参加していた人物の一人であった。では、坪井の児童博覧会の評価とはどのようなものであったのだろうか。

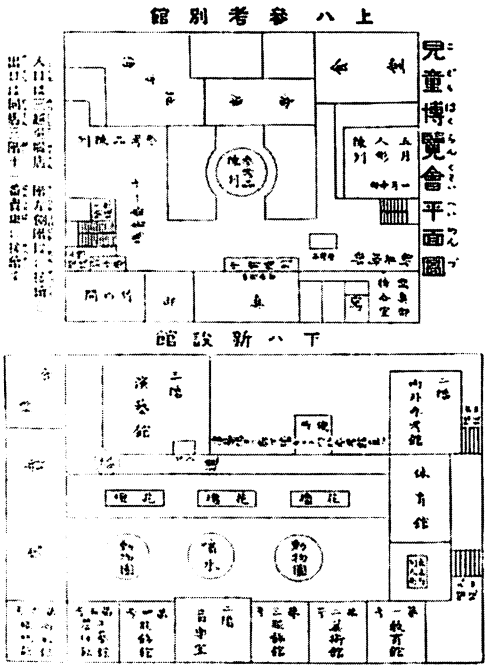


図2

大人が大勢入っては子どもに見られないようになるから、子供だけに見せるやうにしたら宜しかろうというようなことを聞きましたが、矢張大人が大勢来て面白がって見て居ると此所に来て居る中は屋根の上で汽車の動くのや、玩具の列んで居るのや、活動写真の動くのを見て、外のことは忘れてしまって、自分が子供にかへってしまい、子供と一緒に楽しむことが出来る、外にどんなことがあっても考えないで、子供の心になって喜ぶということは、誠に結構なことと思うのであります、(中略) 此博覧会の為に子供と親とが一層親しくなり、大人は一層子供のことを能く思うようなことが知らず織らずの間に出来て来た一つの効であります、又大人が子供のやうな心になってしまつて、無邪気になるということも宜しいことであると思うのであります。(坪井正五郎2005)

つまり児童博覧会は、子どもが観づらくなるくらい大人も大勢入っていて、大人も子どもも楽しめる展示空間であったことが伺え、また坪井の博覧会の評価もそこにあったと言える

5　まとめ

こども博覧会が、博物館学的展示要素を満たしているとは決して言えないであろう。何故なら、展示の目的に「個々の資料が内臓する学術情報を研究することにより導き出し、その成果を伝え

教育することにあり・・・」（青木豊2003）という展示の目的を担っていないからである。学術研究会による「こども博覧会」は、商業との関わりを持たず、純粋に教育を目的としたものであったとされているが、選別ということをしなかった点を取り挙げれば、単なる羅列にもなりかねず、成果を伝え教育するにまで至らなかったのではないだろうか。しかし、その反省により、選別し賞賛し児童用品研究会のシステムが取られるようになった三越の「児童博覧会」であるが、商業スペースを利用した博覧会は、日比翁助が「健全な国民となるべき児童を養成するに必要な玩具を改良したいので、決して自家の広告ではない」と述べてはいるものの、やはり、商売から離れることは出来ず、純粋に教育を伝えるには至らなかったであろう。三越の「児童博覧会」を手本とした後のこども博覧会も、「娯楽」や「遊び」に焦点を当てるようになっていく。当初の児童教育という観点から少し離れ、展示を購買経路の一旦として考えていたという点に、児童博覧会からこども博物館へ発展できなかった理由があるのではないだろうか。もし巌谷が当初に目論んでいた、「教育博物館の一部にこのような施設」を付せることが出来たのであれば、日本における児童博物館、こども博物館がもっと早くに一般市民に知られていることとなったかもしれないのである。

しかし、こども博覧会や児童博覧会においても、今日のこども博物館は見習う点があると看守されよう。それは、「大人も楽しめる展示」の考察である。坪井の話しにもあったように、三越の「児童博覧会」には、それがあった。しかし、今日の日本のこども博物館、チルドレンズ・ミュージアムは、子どもにのみ焦点を当て過ぎていて、大人は、単なる保護者にしかなれないのが現状ではないだろうか。欧米のチルドレンズ・ミュージアムから学ぶのも非常に大切なことであると思うが、大人も子どもも楽しめる展示が明治時代にもあったという事実を知ることも大切なのではないだろう。

【註】

(1) こども博覧会を児童博覧会としている書物もあるが、三越の児童博覧会との区別を明確にするため、筆者は三越開催のものを児童博覧会、それ以外をこども博覧会と称した。

(2) 中村喜代子　1997年『美術教育学―美術科教育学会誌』「近代日本における＜こども＞イメージと博覧会―三越におけるこども博覧会の濫腸」美術教育学会

(3) 菅原教造　1909年『みつこしタイムス第７巻８号臨時増刊号』「児童博覧会感想」三越呉服店　p.136～152

(4) 是澤優子　1995年『東京家政大学研究紀要第35集（1）』「明治期における児童博覧会について（1）」東京家政大学

(5) 1909年『みつこしタイムス第７巻８号臨時増刊号』「私と児童博覧会」三越呉服店　pp.157～160

(6) 中村喜代子　1997年『美術教育学―美術科教育学会誌』「近代日本における＜こども＞イメージと博覧会―三越におけるこども博覧会の濫腸」美術教育学会

(7) 1909年『みつこしタイムス第7巻8号臨時増刊号』「柳澤伯の児童博覧会感想」三越呉服店 p.152

(8) 巌谷小波　1909年『みつこしタイムス第7巻8号臨時増刊号』「私と児童博覧会」三越呉服店

遺憾に思ったのは、折角あれだけの計画をしながら、出品に対して審査の行われなかったことでした。すでに博覧会と称して諸種の出品を促した以上は、之に対して又審査を行い、褒むべきところは褒め、貶くべきは貶けないでは、所謂る佛造って魂を入れぬようなもの、如何にも物足らない心地がしたのです。

(9) 1909年『みつこしタイムス第7巻8号臨時増刊号』「児童博覧会開設の由来」三越呉服店 pp.2～6

(10) 1909年『みつこしタイムス第7巻8号臨時増刊号』「児童博覧会報告」三越呉服店　pp.16～20

(11) 青木豊　2000年「展示の概念」『新版　博物館学講座9　博物館展示法』雄山閣

【引用参考文献】

寺下勅　2005年『別冊太陽　日本のこころ133　日本の博覧会　寺下勅コレクション』平凡社

是澤優子　1995年『東京家政大学研究紀要第35集 (1)』「明治期における児童博覧会について (1)」東京家政大学

巌谷小波　1909年『みつこしタイムス第7巻8号臨時増刊号』「私と児童博覧会」三越呉服店

巌谷小波　1899年『洋行土産上』「伯林百談」

中村喜代子　1997年『美術教育学―美術科教育学会誌』「近代日本における＜こども＞イメージと博覧会―三越におけるこども博覧会の濫腸」美術教育学会

吉見俊哉　1992年『博覧会の政治学』中公新書

星野小次郎　1952年『日比扇助』　「学俗協同」宮越信一郎

是澤優子　1997年『東京家政大学研究紀要第38集 (1)』「明治期における児童博覧会について (2)」東京家政大学

小松徹三　1941年　『大三越の歴史』日本百貨店調査所

坪井正五郎　2005年『知の自由人叢書　うしのよだれ』国書刊行会　2005年

青木豊　2003年『博物館展示の研究』雄山閣　福田ふみ

開会日	閉会日	博覧会名	開催地	会場	主催	入場者数
明治						
1872. 3 .10	4 . 3	湯島聖堂博覧会	東京都	湯島聖堂大聖堂（会場に童子館を建て、育児参考品を陳列）	文部省博物局	192878
1906.10. 1	11. 5	こども博覧会	東京都	上野公園	教育学術会	不明
1906.11. 1	11.25	京都こども博覧会	京都府	岡崎公園	市教育会	不明
1906.11. 1	12. 1	こども博覧会	大阪府	府立博物場	不明	不明
1909. 4 . 1	5 .15	第一回児童博覧会	東京都	三越呉服店	三越	不明
1910		第二回児童博覧会	東京都	三越呉服店	三越	不明
1910.10. 1	10.21	子供博覧会	福岡	福岡市	小共進会	不明
1911. 3 .15	6 . 8	第二回こども博覧会	大阪府	大阪府立博物場	不明	不明
1911. 3		第三回児童博覧会	東京都	三越呉服店	三越	不明
1911		島根県子供博覧会	島根県	不明	不明	不明
1911.10.10	10.31	山林こども博覧会	大阪府	大阪箕面公園	箕面有馬電気軌道株式会社	不明
1912. 3 .20	4 . 3	岡山児童博覧会	岡山県	東山公園	岡山商工会議所	不明
1912. 5		第四回児童博覧会	東京都	三越呉服店	三越	不明
大正						
1918. 7 .11	9 . 8	第二回婦人子供博覧会	東京都	上野公園、不忍池畔	読売新聞社	不明
1926. 1 .13	2 .14	皇孫御誕生記念こども博覧会	東京都	上野公園、不忍池畔	東京日日新聞社	5000000
1926. 7 . 1	8 . 2	皇孫御誕生記念こども博覧会	京都府	岡崎公園	大阪毎日新聞社、東京日日新聞社	1509544